

授業「性はグラデーション」

小学校でLGBT教育模索

性的少数者（LGBT）の子どもたちが生き生きと過ごせる環境を作りたい……。その思いから「多様な性」について、小学校の授業で伝えようとする取り組みを学校や当事者団体が模索している。

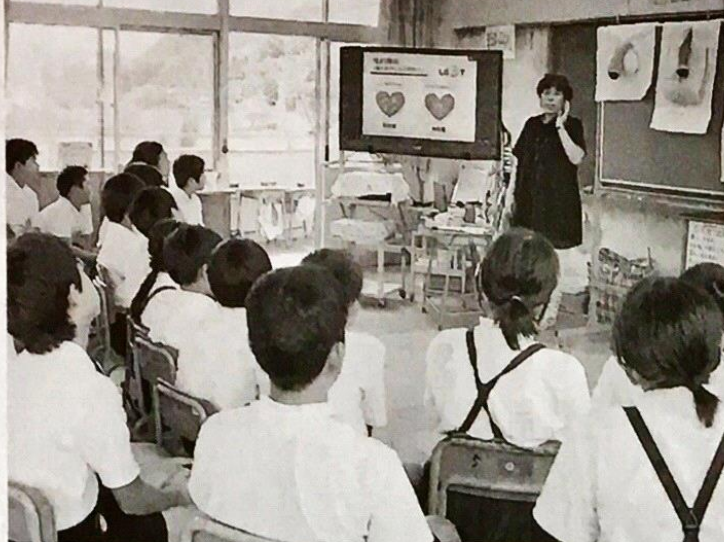
9月中旬、倉敷市立穂井田小学校（同市玉島）の5、6年生24人が性教育の授業を受けた。

ゲスト講師でスクールカウンセラーの為清淑子さん（61）が、男女の体の違いなどを説明する中で、「性は男と女の二つだけじゃないよ」と話すと、子どもたちから「どおゆうこと？」と疑問の声が上がった。

「性はグラデーションでつながっていて、人によって感じ方や在り方が違う。体が男で気持ちや女の人もいるし、体も気持ちも女で好きな人も女って人もいるよ」と為清さん。

子どもたちは顔を見合わせたり、うなずいたりしながら話を聞いた。

倉敷市は昨年度、「性の多様性」を人権教育の課題とし、市内の小中学校計10校で学習方法を研究した。児童や生徒の発達に応じた



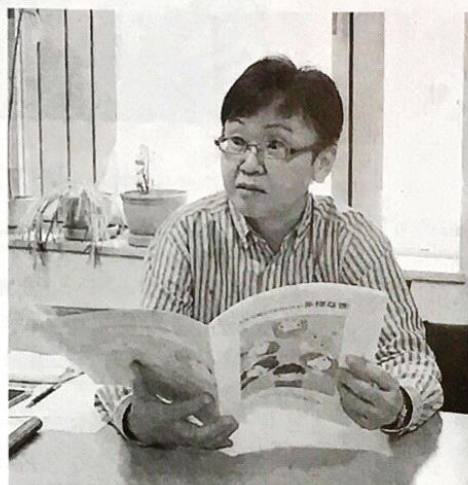
愛情や恋愛感情などの対象となる性を意味する性的指向について説明する為清淑子さん（中央）＝倉敷市玉島

学習内容をまとめた。

同校はその10校のひとつで、昨年度はLGBTの専門家を招いて教員や保護者向けの勉強会を開いた。3年生に性別の在り方について考えてもらう授業のほか、5、6年生と性同一性障害の当事者との交流会も企画した。三宅由紀校長は「私も含めLGBTについてほとんど知識がない教員

「正しい知識持ち指導」

文科省、教員向け手引



県内の教員ら向けの研修を開いているブラウド岡山の鈴木富美子代表（岡山巽市北区南方面2丁目）

文科科学省は2015年に初めてLGBTの子どもに配慮するよう、都道府県教委などに通知をした。

昨年には性同一性障害の生徒に対し、自認する性別の制服や体操服の着用、職員用トイレや多目的トイレの利用を認めるといった支援方法を紹介する教員向けの手引も公開した。

その一方で、今年3月に発表した新学習指導要領で「保護者や国民の理解などを考慮すると難しい」とし

が多かったので学びの連続だった」と振り返る。

研究を通し今は、教科書で「思春期になると異性への関心が芽生える」といった記述がある時は、教員が「同性を好きになる人もいるよね」などと一言触れるようにしている。

図書室や保健室にLGBTに関する本を置き、興味がある児童が手に取れるようにもした。「多様な人を認め合う学校環境を作り、児童にも周りを受け入れる気持ちを持って欲しい」と三宅校長は語る。

性の多様性への理解を、学校現場でも深めようという動きは広がっている。

岡山市教育委員会は昨年度、当事者団体「ブラウド岡山」と一緒に教員向けの啓発パンフレット「先生に知ってもらいたい多様な性」を作った。今年5月には市内の全教諭に配布。その後も教諭やPTA向けの研修や講座を開いている。県教育委員会も教員向けの人権研修で、LGBTの専門家や当事者に講師を務めてもらうなどの取り組みを行っている。

クリニックを受診した当事者1167人へのアンケートでは、56.6%が小学校入学前から自らの性別へ違和感を自覚したと答えた。中学生までに自覚した人を含めると約9割になる。

家庭や学校、マスメディアなどを通してLGBTへの否定的な言動を聞くことで「自分はおかしい」と感じてしまう人が多く、当事者の12.6%が小学生の時に自殺を考えたことがあると答えた。

鈴木代表は「性が多様であることを先生が正しく伝えることで生きづらさが解消される当事者がいる」と期待するが、ブラウドのメンバーからは「先生の理解が不十分なままでは授業をしてほしくない」「授業をきっかけに当事者探しが始まらないか」という不安の声もあるという。

鈴木代表は「中途半端に扱うことで当事者が傷つけられる恐れも確かにある。だからこそ、先生にはまず正しい知識を持って欲しい」と訴える。